

心の散歩道

本質を見抜く眼

インドをはじめ東南アジアの色々な国へ旅行しますと
センエン センエン 三個でセンエン と声を掛けて
くる子供たちや土産売りによく出逢います。日本人は買い
物が好きだと云われますが、言い値で物を買う人はまずい
ません。交渉していくらか負けさせて買うのが常識です。

ネクタイ五本を千円で買って帰ると、同室の友人が十本千円で買ったと云われし
ったと思っても既に手遅れ。アジアの国で買い物をするのは疲れる。やっぱり日本
はいいなあ、定価販売だから という言葉もよく耳にします。だからといって、何
でも定価で買える日本がいいとは限りません。現地の人は売り手がどれほど負けて
くれても自分の商品の価値を判断して、思っている値段より高ければ買わない。よく
考えてみれば、アジアの人々の方が本当の買い方をしているように思えます。物の
値段は主観で決まります。欲しければ高くても買い、どちらでもよければ安くなけ
れば求めようとしない。定価があるから安心して買えるというのは、自分自身の目
で、物の値打ちをしつかり見極められないからだともいえるでしょう。

私たちは日常生活において、人や物に対してでも自分の目で評価しようとしなくて、
他人の下した判断をそのまま踏襲(とうしゅう)して過ごしていることが多いようです。
家柄や学歴、役職等々いわば定価で人の値打ちを決めてしまいがちです。二十世紀
の科学技術文明の全盛期には、一元的な価値観に支配され、低・劣・短・小など、
マイナーなものは排除されてきました。最近ではその反省から、多様な価値が認め
られる傾向にあります。未だに勝ち組・負け組と評価されることも多くあります。
価値観の多様化した時代には、何よりもマイナーなものの中にかげがえのない特性
を見つけ出す、自分自身の目を持つことが必要になります。

秘密 というのは、誰かが物惜しみして隠していることではなく、自分の目の方
が閉じられているから見えただけのことです。お大師様は、般若心経秘鍵 の中で、
医王の目には、途に触れて、みな薬なり。解宝の人は、鉉石を宝と見る と述
べられています。物事を表面的な見かただけで満足せずに、その奥底に隠れている
本質までも見通す目が必要ではないでしょうか。

日本には、正月やお盆をはじめ四季折々の行事や文化の中で、いのちの流れ、生
かされているいのち、生きる本質を学んできましたが、昨今の生活にはそのような
習俗が無駄なように扱われたり、商売の肥やしとされることが多くなりました。文化
の発展は経済の活性化であると云われます。本質にふれることで本質を見抜く眼が養
われるのではないのでしょうか。

